

# 神の裁きの時が来た-第一

## 生ける者の審判と9/11の預言的意義

Jeff Pippenger

2024-12-18

かなり前から、実際には9/11直後から、私たちは生ける者の裁きが9/11に始まったと一貫して教えてきました。私たちは、この事実を、まったく異なる観点からそれを裏づける多数の聖書の証言によって理解しました。2023年7月以降、9/11直後に明らかになっていた詳細と比べて、9/11に始まった生ける者の裁きについてさらに多くの詳細を理解するに至りました。なぜ生ける者の裁きは9/11に始まったのか。聖書における生ける者の裁きとは何か。

ヨハネの黙示録の第1章では、キリストについて示されている主な特質は、彼がアルファでありオメガ、初めであり終わり、最初であり最後であるということだ。彼がヨハネに、かつてあった事柄を書き記すよう命じたとき、まさにその特質の実例を示された。そうすることでヨハネは、これから起こる事柄もまた書くことになるからである。イエスはいつも、初めをもって終わりを示される。それがイエスという方なのだ。

聖書はイエスを「ことば」と呼んでいる。聖書の最初の書である創世記は「初め」を意味する。聖書の最後の書は黙示録であり、創世記で最初に示された真理は黙示録で取り上げられている。創世記はアルファ、黙示録はオメガであり、両者を合わせると「ことば」となる。そしてその「ことば」とは、アルファでありオメガであるイエスである。神の署名、すなわち御名は、聖書の預言のすべての箇所に記載されている。その署名が、その箇所の光が真理であることを確証する。

もし預言の箇所の解釈が神の印、すなわちその御名、その御性質を帯びていないなら、その解釈は誤りである。神の預言の御言葉を解釈する際に適用すべきほかの試金石もあるが、いずれの試金石を用いるにしても、その基準は神の御言葉のうちで定義されていないなければならない。人為的な試金石がなければ、人為的な解釈も少なくなる。では、なぜか？そして、何か？9/11に始まったという聖書の生ける者の審判とは何か？

キリストは『ヨハネの黙示録』でご自身を紹介するにあたり、ご自身を初めであり終わりであると示し、その御性質が何を意味するのかを例証するために預言者ヨハネを用いる。キリストは、この書全体のメッセージをご自身の啓示であると明らかにする。さらにヨハネに、当時ヨハネの世界に存在していた事柄を書き記すよう命じ、それによってヨハネは世の終わりに起こることを記録することになる。ヨハネはキリスト教会の始まりにおける十二人の指導者の一人であった。したがってヨハネは、黙示録第七章において十四万四千人と大群衆によって表されている、キリスト教会の終わりを示している。

聖書の論理はこうである。イエスは御言葉であり、すべてのものは彼によって創造され、御父と共に永遠から存在しておられた。また、彼は神の御言葉であるゆえに、聖書でもある。神の御言葉の最後のメッセージで紹介されるキリストの品性の第一の特質は、同じ事柄の始まりによってその終わりを示す、ということである。もしこの神の品性に関する真

理が人の聖書研究に適用されないなら、生ける者の裁きとは何か、なぜそれが9/11に始まったのか、そしてさらに重要なことに、なぜそれがほとんど終わろうとしているのかを、真に知ることはできない。

アルファとオメガの原則の一例として、古代イスラエルは現代イスラエルの型であり、これは「文字通りのイスラエルが霊的イスラエルの型である」とも言い表すことのできる預言的真理である。どのように表現しようとも、古代の文字通りのイスラエルと現代の霊的イスラエルの双方には、始まりの歴史と終わりの歴史がある。四つの歴史のうち三つは過去のもので、私たちは今、第四の、最後の歴史の中にいる。

三つの過去の歴史は、地球の歴史の最後の世代の三人の証人を表している。これら三つの過去の歴史は、黙示録で十四万四千人として表されている世代を特定する。十四万四千人をも扱う他の預言的な歴史の系列もあるが、十四万四千という数には、古代の文字どおりのイスラエルの十二部族と現代の霊的イスラエルの十二弟子を掛け合わせることによって預言的に表される者たちが十四万四千人であるという預言的象徴が含まれている。

アルファとオメガのもう一つの例として、ヨハネの黙示録14章の三人の天使は、始まりと終わりの歴史を表している。ミラー派運動は三人の天使の始まりの歴史を表し、十四万四千人の運動は第三の天使のメッセージの終わりの歴史を表している。アルファの運動は1844年10月22日に調査審判の開始を宣言し、オメガの運動は生ける者の審判の開始を宣言して、その開始を9/11と特定した。

靈感によって容易に支持されるアルファとオメガの第三の例は、初めに、ミラー派のアルファ運動において十人の乙女のたとえが文字どおりに成就した、という点である。ホワイト夫人は、そのたとえが当時成就したという文脈で、著書『The Great Controversy』の中にミラー派の歴史を位置づけている。彼女は、十四万四千人のオメガ運動もまた、十人の乙女のたとえを文字どおりに成就する、と教えている。終わりを初めと結びつけるキリストによる三つの簡潔な証言。

古代イスラエルの初めに、主は門柱と鴨居に塗られた血で表されたように、ヘブライ人と契約を結ばれました。これはもちろん、神の御言葉における「真夜中の叫び」への最初の言及です。バプテスマはキリストとの契約関係の象徴であり、パウロは、エジプトを出たヘブライ人は皆、「雲において、また紅海において」バプテスマを受けたと教えています。彼らが海を渡ったのち、マナが与えられましたが、それは他の意味合いもあるものの、試しとしての文脈では第七日安息日の象徴です。

「マナ」は彼らの最初の試練を表している。そして、彼らがヨシュアとカレブのメッセージを退け、第十にして最後の試練に失敗したとき、主は彼らをご自身の契約の民として退け、ヨシュアとカレブと契約を結ばれた。ついに彼らが約束の地に入ったとき、四十年間に生まれた男子には割礼の儀式は施されなかった。というのも、その儀式はカデシュの反逆のときに中止され、入る直前に再びカデシュで再開されたからである。これはアルファとオメガのしるしである。

四十年にわたる荒れ野の放浪は、ヨシュアとカレブの語った言葉への反逆から始まり、モーセが岩を打つという反逆で終わり、そのため神の品性と御業が誤って示されること

になった。古代イスラエルの始まりは、古代イスラエルの終わりを示している。

古代イスラエルの終わりに、マラキ書三章の「契約の使者」としてのイエスは、ダニエル書九章の成就として、一週のあいだ多くの者と「契約」を堅くするために来られた。「契約の使者」として、キリストは、以前の契約の民を通り過ぎられたまさにその歴史の中で、キリスト教会と契約を結ばれた。神の契約の民としての古代イスラエルの始まりにおいて、主はそれ以前の契約の民を通り過ぎられ、新たに選ばれた民と契約を結ばれた。古代イスラエルの終わりにも、まったく同じことをなされた。

契約の象徴は婚姻であり、キリストの誕生から西暦70年のエルサレム滅亡に至るまで、預言は神が古代の文字通りのイスラエルを段階的に離縁していくことを示している。では、その離縁が実際に効力を持ったのはいつなのか。キリストの誕生時か、死の時か、ステパノの石打ちの時か、それともエルサレム滅亡の時か？

その間、あらゆる国々からの礼拝者たちが、神の礼拝のために奉獻されたその神殿を訪れた。金や宝石に輝き、その美と壮麗さは目を奪う光景であった。しかし、その麗さに満ちた宮殿のうちに、もはやエホバを見いだすことはできなかった。民族としてのイスラエルは自ら神と離縁していた。やがて地上での働きの終わりが近づいたとき、キリストが最後に神殿の内部を見おさめられ、こう言われた。「見よ、あなたがたの家は荒れ果てたままにしておかれる。」マタイ23:38。それまで彼はその神殿を「わたしの父の家」と呼んでおられた。しかし、神の子がその壁の中から出て行かれたとき、神の臨在は、神の栄光のために建てられたその神殿から永遠に去った。使徒行伝、145。

エルサレム入城の翌日、キリストはユダヤ人の家が荒れ果てていると宣言し、離婚は最終的に成立した。したがって、離婚はエルサレム入城の日の日没に成立した。

エルサレムは彼の慈しみに生まれた子であり、優しい父が道を外した息子を嘆くように、イエスはその愛する都のために涙を流された。どうして汝を見捨てることができようか。どうして汝が滅びに定められるのを見ていられようか。汝の不義の杯を満たすにまかせねばならないのか。ひとつの魂の価値はそれほど大きく、それに比べれば幾多の世界も取るに足りなくなる。しかしここでは、まるごとの一民族が失われようとしていた。急速に西へ傾く太陽が天から姿を消すとき、エルサレムの恵みの日は終わるであろう。行列がオリブ山の頂で立ち止まっている間は、エルサレムが悔い改めるのにまだ遅すぎはしなかった。憐れみの御使いはそのとき、正義と迅速に迫る裁きに席を譲るため、黄金の御座から降りようとして翼をたたみつつあった。だが、キリストの偉大な愛の御心はなおも、彼の憐れみを嘲り、彼の警告を侮り、まさに彼の血にその手を染めようとしているエルサレムのために執り成し続けていた。エルサレムがただ悔い改めさえすれば、まだ遅くはなかった。沈む太陽の最後の光が神殿や塔や尖塔に名残をとどめている間に、ある善き御使いが彼女を救い主の愛へと導き、その破滅をくい止めはしないだろうか。美しくも不敬虔な都、預言者たちを石打ちにし、神の子を退け、悔い改めない頑なさによって自らを束縛の鎖に閉じ込めているその都—その憐れみの日はほとんど尽きようとしていた！

再び、神の御霊がエルサレムに語りかける。この日が終わる前に、キリストへの新たな証しがなされる。古の預言からの呼びかけに呼応して、証しの声が上げられる。エル

サレムがその呼びかけに耳を傾け、その門に入ってこられる救い主を受け入れるなら、なお救われ得る。

エルサレムの指導者たちのもとに、イエスが大勢の群衆を伴って都に近づいているという知らせが届いた。だが彼らに神の子を歓迎するつもりはない。恐れた彼らは群衆を散らそうと、彼に会いに出て行く。行列がオリーブ山を下ろうとしたとき、その行く手は指導者たちに遮られる。彼らはこの騒がしい歓喜のわけを問いたず。彼らが「この方は誰なのか」と問うと、靈感に満たされた弟子たちがその問いに答える。彼らは雄弁に、キリストに関する預言の言葉を繰り返し唱える：

アダムはあなたに言うだろう、蛇の頭を打ち砕くのは女の子孫だと。

アブラハムに尋ねなさい。彼が教えてくれる。それは『サレムの王メルキゼデク』、平和の王だ。創世記14:18。

ヤコブはあなたに告げるだろう。彼はユダ族のシロである。

イザヤはあなたにこう告げる。「インマヌエル」、「不思議な者、助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」。イザヤ書7章14節;9章6節。

エレミヤはあなたに告げるでしょう、ダビデの若枝、『主は我らの義』。エレミヤ書23章6節。

ダニエルはあなたに「彼はメシアだ」と言うでしょう。

ホセアはあなたにこう告げる。「彼は万軍の主なる神であり、主はその記念である。」ホセア 12:5。

バプテスマのヨハネはあなたに、彼は『世の罪を取り除く神の小羊』であると告げるでしょう。ヨハネ 1:29

大いなるエホバはご自分の御座から宣言された。「これはわたしの愛する子である。」マタイ 3:17。

私たち、彼の弟子たちは宣言する。この方こそイエス、メシア、いのちの君、世の贖い主である。

そして、闇の勢力の君も彼を認めてこう言う。「あなたがだれであるか、私は知っている。神の聖なる方だ。」マルコ 1:24。『The Desire of Ages』577-579。

キリストの凱旋入城の歴史は、ミラー派の時代における真夜中の叫びの歴史を型として示していた。ホワイト姉妹の記述は、入城が始まったときに人々が聖霊の感動を受け、その後キリストが立ち止まってエルサレムのために涙を流されたことを示している。その後、キリストは入城を続けられ、ユダヤ人の指導者たちに対峙された。ミラー派の歴史に繰り返し現れる道標を特定するため、この物語のいくつかの特質を取り上げたい。しかしまず、始まりと終わりについて一点述べておきたい。いまホワイト姉妹から引用した箇所は一つの章の結びに当たり、次の章の冒頭には次のように記されている。

キリストのエルサレムへの凱旋入城は、天使たちの凱歌と聖徒たちの喜びのただ中に、力と栄光をもって天の雲に乗って来られるその時の、かすかな前兆であった。その

とき、キリストが祭司たちとパリサイ人に言われた言葉「今後あなたがたは、『主の御名によって来られる方は祝福されている』と言うその時まで、もはやわたしを見ることはない」が成就する。マタイ23:39. 預言的な幻の中で、ゼカリヤはその最終的な勝利の日を示され、また、初臨の時にキリストを拒んだ者たちの破滅も見た。「彼らは自分たちが刺し貫いたわたしを仰ぎ見、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、長子のために苦悩する者のように彼のために苦悩する。」ゼカリヤ12:10. キリストは都を見てその上に涙を流されたとき、この光景を予見しておられた。エルサレムの一時的な滅亡のうちに、彼は神の子の血を流した罪を負うその民の最終的な滅びを見た。

弟子たちは、ユダヤ人のキリストに対する憎しみを目にしていたが、それがどのような結果を招くのかはまだ見えていなかった。彼らはイスラエルの真の状態をまだ理解しておらず、やがてエルサレムに降りかかる裁きも悟っていなかった。これをキリストは、重大な象徴的行為を通して彼らに明らかにした。

エルサレムへの最後の訴えはむなしく終わった。祭司たちと支配者たちは、「これは誰か？」という問いに、群衆が過去の預言の声をこだまするようにして答えるのを聞いたが、それを靈感の声としては受け入れなかった。彼らは怒りと驚きのあまり、人々を黙らせようとした。群衆の中にはローマの将校たちもあり、敵対者たちは彼らに、イエスを反乱の指導者だと告発した。彼らは、イエスが神殿を占拠し、エルサレムで王として統治しようとしているのだと申し立てた。『The Desire of Ages』580頁。

私が見落としたくなかった点は、キリストのエルサレムへの凱旋入城が、ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」だけでなく、世の終わりも予表しているということである。それは、黙示録20章の千年期の初めにおけるキリストの再臨、また千年期の終わりに新しいエルサレムと共に戻られることとも結び付けられている。また、再臨の際に悪者が死ぬこと、そして千年期の終わりに行われる彼らの最終的な裁きとも関連している。最後の段落の冒頭には、こう記されている。「エルサレムへの最後の呼びかけはむなしく終わった。祭司や支配者たちは、『これは誰か』という問いに対する群衆の答えの中に、過去からの預言の声の反響を聞いたが、それを靈感の声として受け入れなかった。」

最後の訴えはむなしく終わり、その訴えは「過去の預言的な声」として表現された。キリストの時代の群衆は、彼らに対する最後の訴えを退けた。彼らは古い道に立ち戻れというエレミヤの勧告を退けたからである。彼らはまた、「行に行を重ねる」方法論も拒んだ。というのも、弟子たちは「これは誰なのか」という問いに対し、ここにも少し、そこにも少しと、幾人かの証人を集めて証言を突き合わせ、行に行を重ねるようにして答えていたからである。

キリストがエルサレムへの入城を始めると、途中で立ち止まる。それは、弟子たちがキリストの乗るろばを連れてくることによって預言が成就するところから始まる。彼はこれまで動物に乗ったことがなく、その動物もまた誰かに乗られたことがなかった。理屈からすればそれは奇跡だとわかる。初めて乗られて従う動物などいるだろうか。まして、これまで一度も人を乗せたことのないろばを、どう扱って乗りこなせるというのか。これは、ペリシテ人が契約の箱とともに供え物を荷車に載せ、どちらも子に乳を飲ませている、しかもこれまで一度も車を引いたことのない雌牛二頭をつないだときのことと似ている。す

るとその雌牛たちはすぐに子牛から離れ、契約の箱をヘブライ人のもとへ返すための道のりに出発した。契約の箱はエルサレムへ向かっており、ダビデがついにそれをエルサレムに運び入れたとき、彼はキリストの凱旋入城を予表した。

キリストがろばにお乗りになると、人々は自分の上着を道に敷き、しゅろの枝を切り取って、群衆はこう叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の御名によって来られる方は祝福されよ。いと高き所にホサナ。」（マタイ 21:9）指導者たちは反発し、イエスに群衆を黙らせるよう求める。そのまま一行は進み、イエスは立ち止まって、エルサレムに象徴される失われた人類のために涙を流される。やがて行列が進むと、指導者たちは再び口を挟み、イエスが何者なのかを問いただす。すると弟子たちは、預言者たちの証言を次々に示して答える。

私たちが今取り上げている歴史に先立って、十人の乙女のたとえに描かれた預言の系列における最初の失望を画するラザロの復活があり、また、ダビデのエルサレムへの凱旋入城の系列においてはウザが契約の箱に触れた出来事があった。最初の失望は「遅れの時」と結びついており、キリストはラザロの病を最初に聞かれたとき、その場にとどまって遅れて行かれた。ちょうど、ダビデがウザの死んだ場所に契約の箱をしばらく留め置き、後になってそれを取りに行ったように。ラザロは死に、その後よみがえらされた。そしてその後、イエスがその上にお乗りになってエルサレムに入られるろばを導いたのはラザロである。

ミラー派の歴史において、第二の天使は1844年4月19日、最初の失望の時に到来し、それは待機期間の始まりを画した。その後、サミュエル・スノーは真夜中の叫びのメッセージを段階的に展開し始めた。そのメッセージの段階的発展は、キリストのエルサレム入城によって表されている。また、スノーの働き進展は、契約の箱の移動、すなわちペリシテ人のもとから、牛車に載せられ、ウザの出来事を経て、最終的にエルサレムに至る過程にも象徴されている。

その入場は、指導者たちがキリストに群衆を黙らせるよう求めたときの民の最初の宣言で始まり、続いてキリストが涙を流し、さらに頑なな指導者たちがキリストは誰かと問いただしたときの弟子たちの宣言へと続いた。頑なな指導者たちの最初の反応を引き起こした民のうちの靈感の現れは、弟子たちが「行に行を重ねて」過去からの数多くの預言的な証人を挙げたとき、彼らによって繰り返された。その日、日が沈むと、古代イスラエルは神から離縁されていた。

その記述では、弟子たちは「エルサレムに下るはずの裁き」を理解していなかったと知らされている。その「エルサレムに下る裁き」は、弟子たちに対して「重要な象徴的教訓」によって示された。その重要な教訓とは、いちじくの木が呪われた出来事であった。弟子たちがまだ理解していなかったエルサレムの滅びは、いちじくの木が呪われた出来事によって、また、以前キリストがいちじくの木について教えたたとえによっても、示された。

この警告はあらゆる時代に当てはまる。ご自身の力によって創造された木をキリストが呪われたその行為は、すべての教会とすべてのクリスチャンへの警告として示されている。他者に仕えることなくして、神の律法を生きることのできる者はいない。しか

し、キリストの憐れみに満ちた無私の生き方を実践しない者が多い。自分は立派なクリスチャンだと思っている者の中には、神への奉仕とは何かを理解していない者がいる。彼らは自分を喜ばせるために計画し、思案する。彼らは自分のことしか念頭に置かずに行動する。彼らにとって時間の価値は、自分に利益を集められるかどうかでしか測られない。人生のあらゆる事柄において、これが彼らの目的である。彼らが仕えるのは他者のためではなく、自分のためである。神は、無私の奉仕が求められる世界に生きる者として彼らを造られた。神は、できるかぎりあらゆる方法で隣人を助ける者となるよう、彼らをお定めになった。しかし自己があまりに大きく、ほかの何も見えない。彼らは人々と心を通わせることがない。このように自分のために生きる者は、あらゆる見せかけをしながら実を結ばなかつたいちじくの木のようなものである。彼らは礼拝の形式を守るが、悔い改めも信仰もない。口では神の律法を敬うと言うが、従順が欠けている。言うだけで、行わない。いちじくの木に下された宣告において、キリストは、このむなしい見せかけが御目にいかに憎むべきものであるかを示された。キリストは、あからさまな罪人のほうが、神に仕えると公言しながらもその栄光のために何の実も結ばない者よりも罪が軽いと宣言される。

キリストがエルサレムを訪れる前に語られたいちじくの木のとえは、実を結ばない木を呪ったときにキリストが教えた教訓と直接結びついていた。『The Desire of Ages』584ページ。

指導者たちとの最後の対立の後、イエスは身を引いて夜通し祈り、翌朝、いちじくの木のをそばを通りかかったとき、それを呪った。

熟しいちじくの季節ではなかった。ごく一部の地域を除けば、エルサレム周辺の高地ではまさに「いちじくの時はまだ来ていない」と言えた。ところが、イエスが来られた果樹園には、ほかの木々に先んじているように見える一本の木があった。その木はすでに葉で覆われていた。いちじくは葉が開く前に実が現れる性質がある。ゆえに、葉の生い茂ったこの木は、よく育った実を約束しているかのように見えた。だが、その見かけは人を欺くものだった。イエスが下の枝から梢の先まで探してみると、「葉のほかには何もなかった」。それは見かけ倒しの繁った葉の塊にすぎなかった。

キリストはそれに向かって、枯れさせる呪いを宣告された。「今よりのち、いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように」と彼は言われた。翌朝、救い主と弟子たちが再び都へ向かう途中、枯れた枝としおれた葉が彼らの注意を引いた。「先生、ご覧ください。あなたが呪ったいちじくの木が枯れてしまいました」とペテロが言った。

キリストがいちじくの木を呪った行為は、弟子たちを驚かせた。彼らには、それは彼のいつもの行いとわざとは違っているように思えた。彼らはしばしば、彼が世を罪に定めるためではなく、彼によって世が救われるために来られたのだと言うのを聞いていた。彼らは、「人の子は人々のいのちを滅ぼすためではなく、救うために来たのだ」という彼の言葉を思い起こした。ルカ 9:56. 彼の驚くべきわざは、これまで回復するためにこそ行われ、決して破壊するためではなかった。弟子たちは彼を、回復者、癒やし手としてのみ知っていた。この行為は他に類のないものだった。その目的は何だったのか、と彼らは問いかけた。

「神は『あわれみを喜ばれる』。『わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪しき者の死を喜ばない。』ミカ書7章18節;エゼキエル書33章11節。神にとって、滅びの業と裁きの宣告は『異なる業』である。イザヤ書28章21節。しかし、将来の覆いを取り去り、人々に罪の歩みの結果を明らかにされるのは、あわれみと愛ゆえである。」

「いちじくの木に対する呪いは、行為によるたとえ話であった。その不毛の木は、まさにキリストの面前で見せかけの葉を誇らしげに繁らせていたが、ユダヤ民族の象徴であった。救い主は、イスラエルの滅びの原因とその確実性を弟子たちに明らかにしようと望まれた。そのために、主はその木に道徳的性質を与え、神の真理を説き明かすものとされた。ユダヤ人は神への忠誠を公言し、他のすべての国々とは異なる存在として立っていた。彼らは神から特別な恵みを受け、自分たちは他のどの民にもまさる義を持つと主張した。だが彼らは、世への愛と利得への貪欲によって墮落していた。知識を誇りながら、神の求めるところには無知で、偽善に満ちていた。実のない木のように、彼らは見せかけの枝を高々と広げ、見た目には繁茂し、目には美しかったが、『葉ばかりで、ほかには何もなかった』。壮麗な神殿、聖なる祭壇、冠を戴く祭司、そして印象的な儀式を備えたユダヤ教は、たしかに外見は立派であったが、謙遜と愛と慈しみが欠けていた。」 The Desire of Ages, 581, 582.

私たちは、今まさに答えつつある二つの問いを取り上げることから始めました。その問いは、「なぜ9/11に生ける者の裁きが始まったのか？ 聖書における生ける者の裁きとは何か？」です。

私たちが今しがた提示した数行の預言は、生ける者の審判に関する聖書的な証しである。これらの預言は、審判の単なる「ABC」をはるかに超える事柄を扱っているが、私たちはまず9/11と生ける者の審判に関する問いに答えている。

預言者ダニエルは言う。「わたしは見ていた。ついに座が据えられ、日の老いたる方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、その頭の髪は純白の羊毛のようであった。その座は燃える炎、その車輪は燃える火であった。火の川が御前から流れ出た。千千は彼に仕え、万万はその前に立った。裁きは開かれ、書物は開かれた。」ダニエル書7章9、10節、R.V.

このようにして、全地の裁き主の御前で人々の品性と生涯が吟味され、各人に『その行いにしたがって』報いが与えられる、その偉大にして厳粛な日が、預言者の幻に示された。『日の老いたる者』とは父なる神である。詩人は言う、『山々が生み出される前から、あなたが地と世界を形づくられる以前から、永遠から永遠に至るまで、あなたは神であられる。』詩篇 90:2。すべての存在の源、またすべての律法の泉であるお方ご自身が、その審判を司られるのである。そして聖なる御使いたちは奉仕者また証人として、『幾万の幾万、幾千の幾千』にのぼる数をもって、この大いなる裁きの座に列席する。

「見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のもとに近づき、その前に導き出された。彼には、すべての民、諸国民、諸言語の者が彼に仕えるようにするために、主権と栄光と国が与えられた。彼の主権は過ぎ去ることのない永遠の主権である。」ダニエル書7章13、14節。ここで述べられているキリストの来臨は、地

上への再臨ではない。彼は天において日の老いたる者のもとに来られ、仲保者としての働きの終結に際して彼に与えられる主権と栄光と御国を受けられるのである。1844年、2300日の終わりに起こると預言されていたのは、地上への再臨ではなく、この来臨であった。天の御使いたちに伴われて、私たちの偉大な大祭司は至聖所に入り、神の御前に現れて、人類のためのご自身の奉仕の最後の業に従事される。すなわち、調査審判の業を行い、その効益を受けるにふさわしいと示されるすべての者のために贖いを成し遂げるのである。

型の奉仕においては、告白と悔い改めをもって神の前に来て、罪が罪の供え物の血によって聖所に移された者だけが、贖罪日の奉仕にあずかった。同様に、最終的な贖いと調査審判の大いなる日において審理の対象とされるのは、神の民であると公言する者たちだけである。悪者のさばきは、これとは明確に区別された別個の働きであり、後の時期に行われる。「さばきは神の家から始まらなければならない。もしまずそれが私たちから始まるのなら、福音に従わない者たちの終わりはどうなるのであろうか。」 1 Peter 4:17

天にある記録の書には、人々の名と行いが記されており、それが裁きの判決を決することになる。預言者ダニエルはこう言う。「裁きは開廷し、書物が開かれた。」同じ場面を描写する啓示者は、次のように付け加える。「また別の書物が開かれた。それはいのちの書である。そして、死者は、その行いに応じて、書物に記されている事柄に基づいて裁かれた。」 黙示録 20:12。

いのちの書には、これまで神に仕える者となったすべての人の名が記されている。イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」 ルカ10:20。パウロは忠実な同労者たちについて、「その名がいのちの書にある」と語っている。ピリピ4:3。ダニエルは「かつてなかったほどの苦難の時」を見通して、神の民は「その書に名を見いだされる者は皆」救い出されると宣言している。そして黙示録の記者は、名が「小羊のいのちの書に記されている者」だけが神の都に入ると言う。ダニエル12:1; 黙示録21:27。

「覚えの書」が神の前に記されており、その中には「主を恐れ、その御名を思う者たち」の善行が記録されている。マラキ書3章16節。彼らの信仰のことば、愛の行いは、天に記録されている。ネヘミヤはこう言ってこれに言及している。「わが神よ、私を覚えてください。…私の神の家のために私が行った善行を、消し去らないでください。」ネヘミヤ記13章14節。神の覚えの書には、あらゆる義の業が永遠に記されている。そこには、退けられたすべての誘惑、打ち勝ったあらゆる悪、そして優しいあわれみのことばの一つひとつが、忠実に記録されている。また、キリストのために払われたあらゆる犠牲の行い、耐え忍んだすべての苦しみと悲しみも、記されている。詩人は言う。「あなたは私のさすらいを数え、私の涙をあなたの皮袋にたくわえてください。それはあなたの書に記されてはいないのですか。」 詩篇56篇8節。

人間の罪の記録もまたある。『神は、善であれ悪であれ、隠された事柄もすべて含め、すべての業を裁きに付す。』『人が語る無益な言葉は一つ残らず、裁きの日にその申し開きをしなければならぬ。』救い主はこう言われる。『あなたは自分の言葉によって義とされ、自分の言葉によって罪に定められる。』伝道の書 12:14; マタイ 12:36, 37。秘められた意図や動機も、誤りなき記録に記されている。というのも、神は『や

みの中に隠された事柄を光のもとにさらし、心のはかりごとを明らかにされる』からである。第一コリント 4:5。『見よ、それはわたしの前に書き記されている。…あなたがたの不義、そしてあなたがたの先祖の不義も共に、と主は言われる。』イザヤ書 65:6, 7。

すべての人の業は神のみ前でつぶさに吟味され、忠実であったか不忠実であったかとして記録される。天の書に記された各人の名のそばには、恐るべき正確さをもって、誤ったあらゆる言葉、利己的なすべての行為、果たされなかったすべての務め、隠されたすべての罪、そして巧妙な取り繕いの一切が書き入れられている。天から送られた警告や戒めをなおざりにしたこと、空費したひととき、生かされなかった機会、善にも悪にも及ぼした影響とその遠くまで及ぶ結果、これらはすべて記録の天使によって余さず記録されている。

神の律法は、裁きにおいて人間の品性と生涯が試される基準である。知恵ある者はこう言う。「神を恐れ、その戒めを守れ。これが人のすべての務めである。神はすべてのわざを裁きにかける。」伝道者の書 12:13、14。使徒ヤコブは兄弟たちにこう戒める。「自由の律法によって裁かれる者として、語り、また行いなさい。」ヤコブの手紙 2:12。

さばきにおいて「ふさわしいと認められる」者は、義人の復活にあずかる。イエスは言われた。「あの世に入るにふさわしいとされ、死者の中からの復活にあずかる者は、…天使に等しく、復活の子であるゆえに神の子である。」ルカ 20:35、36。さらに主は、「善を行った者は、いのちの復活に出て来る」とも宣言している。ヨハネ 5:29。義なる死者たちは、「いのちの復活」にふさわしいとされるそのさばきの後まで、よみがえらない。ゆえに、彼らの記録が調べられ、彼らの件が裁かれるとき、そのさばきの座に彼ら自身が立ち会うことはない。

イエスは彼らの弁護者として現れ、神の御前で彼らのために弁護する。「もし誰かが罪を犯しても、私たちには御父のもとに弁護者がおられる。義なるイエス・キリストである。」第一ヨハネ 2:1。「というのは、キリストは、真のものの写しである人の手で造られた聖所に入られたのではなく、むしろ天そのものに入り、今、私たちのために神の御前に現れておられるからである。」「それゆえ、彼はいつも彼らのためにとりなしをしておられるので、彼によって神に近づく者たちを完全に救うことがおできになる。」ヘブル 9:24;7:25。

裁きにおいて記録の書が開かれるとき、イエスを信じたすべての者の生涯が神の前において吟味に付される。地上で最初に生きた者たちから始まり、私たちの弁護者は続く各世代の事案を次々に取り上げ、最後に生存している者たちで締めくくる。すべての名が呼ばれ、すべての事例が綿密に調べられる。受け入れられる名もあれば、退けられる名もある。悔い改められず赦されていない罪が記録の書に残っている者がいるなら、その名はいのちの書から抹消され、その善行の記録は神の記念の書から消し去られる。主はモーセに宣言された。「わたしに対して罪を犯した者はだれでも、わたしの書から消し去る。」（出エジプト記32章33節）また預言者エゼキエルは言う。「正しい者がその義から離れて不義を行うとき、…その者が行ったすべての義は思い起こされない。」（エゼキエル書18章24節）『大争闘』479-483頁。

本研究を継続し、この連載の次回の記事で提起される疑問に答えます.